特別
1699
13

大黒さまとしやうが

藥師通夜物語

一万一万

おはなしの方へ

なんとかなるもの

第一人たる万乗

[illegible]

そもく上新よ。後世といふ所おどろの
ありさまぐら業ぐり宮方山の抱ぐらの
ぐたりもまいのひけりハ後世らそとめされ。
何りで人殺さたまへ。不軍なる出ぱ者の
業と言てひりうの死と殺事れむざんさ
よ。後世中されハ我の業としてぱまぐ人
と殺たる業なり。ぱハ業こ貼まで紀
人なく後醫師よ稽やしと後りう友逢
のりのひけりハ醫師になる人ハぱろこさ時より
学ぶ者とて。よのたく○物どもう孫ハ聊やう

事なるべきとぞ思ひてたゞよりて下のしあり。
江戸の醫書ハかくうかゝ至るかゝる書ゝ脇と
ゞ何とゝうせいぞ被秋 飛ゝ
の事をこうもぞんせどいたうこうしてこゝ。
也胴服ゝ角頭巾。すぐしあかるいふして。
そなく擦るといふ。頭とうゝ。脇式
ゝう鼻声とはゝう。さて病のひまと物た
つゝゝに同ゝ。車びゝの十三ゝといふ
物のおすて。藥とわゝへいさくゝたゝゆゝと
ゝゝゝ。三貼ゝ人なれとぞ被けゝ。被是中を

ゆハゝ。きうてかゝの居ゝ。きくゝして
いゝ。被秋のいくゝ。我ハ丸藥ゝゝゝゝして醫
師のまゝ。被いゝ。神仙解毒。保壽圓。广積圓。藥
元子。ゝ香ゝ名とゝうゝゝゝゝ。
被秋ハ藥ゝ上書。ゝゝめて。ゝ人ゝて。ゝ
同解ゝゝいゝ。ゝれて藥と人の者ゝゝ
ゝゝ。後ハ。師藥ゝゝゝ。被秋醫
師めゝれいゝ。冥加のゝゝゝ。藥師ゝんゝゝ
醫師ゝゝゝゝゝゝ。被秋とさ
ゝゝゝゝゝゝゝの藥生國いゝゝの國を

その郡の郡なり。薬師も。因幡の國の海中へ
流れたまひ。王城へ来りまして。因幡堂
とかうし。御願を尊なりとうんと
て。紀元二十年正月十二日。来給といふ仏
前まひ。南无薬師。瑠璃光如来。我此名号
一経其耳。衆病悉除。身心安乎。迴向して。
御堂を通夜といふけり。更人をつかはし
堂の傍震動。ものさやとなりひ。灯火さ
けりうえまで。聞。牛。寅さ。後ぐの生れと。
かいまでく来るなり。なりなりなりく。氣を視を

別ふそりず。御りと所の所。氣と郡にいてき
たり。老人ひとりあり。名はあまと。中地金剛夜叉明
王の化身や。薬師十二神の時ハ。宮毘羅大将と
わりまと。黒天と使ハ。行ずなり。
唯今十二神。とのく。今合さ七十事。別の
仏よりと。薬師へ祈願ハ。わび。変事。消滅
仏ふつさ。後合被べ。
業。なる。ものよりとりへ。
の業。より二十年の業。
僅して。商賣人。諸職人。家中ハ。

のゆりを面見れば乞食のいづる事。豚蟻の
湧ごとし。海部よりも死しとる者。水よりひきまる奥
のごとく。海中に見て。貧人ハ迷途に立。饑
魔道のごとし。辻くに路頭よ死しとる者。その数と
志ごとく。家くの門前よりひとり物ごとり貧人
なぬ門もなし。町中飢饉なまで。難悲もと
人となりけり。ちつ
なしのちくとべさ物。横唐櫛とかづん
と。歯節ふかなし。ちゃ
慈悲ひ。ぼ惜事下さ
て。嵐の一門楽くし。俵のうげふ絶学花いう
つふ。今ハ引籠。海中に俵ばくとかさとかい。
めまつさへ。明日今日まで。船乗せ。猫とも技
指ちていくせんとて。酒ちるけまで。猫ちし飢
饉よのぞく。嵐とうづひわりさけまば。差ちゃう
だいい。遊事百へ。お事ちなず。天井なげし
けさうづりなぐへ。いんぐ。空見にちうう
なくちひ。猫よ。ちうハ。わるひハ。脚と打。
ひるくなり。舎者宣。離の習。生者必滅の
ちりとん。知なぐ。まの中にいま。知ぐ

くるきものすいかつへそ。孫ずるの嫡いりそ。
果報乃者し世ふいたまつかく祈者しのう
ーうよ。ぴよう。業御へ祈祈やしなとぞやされ
けまそ十二神の変二。伐折羅大将ゝて半のう
ちとくぐさら矢と拾ゝう老へぞくえのぐ
ゝ十ゝれけゝハ。むゝ一飢饉ゝ一ゝれ祈祈めき
まゝう例のいや。例ゝれ者すゝじ新義な
ゆ者ゝむゝくぬゝぐゝやゝれけまゝ五百へ十二神
の者三迷金羅大将ゝて寅のかゝらといさ
ぐゝ。解ゝとゝう者へ人ゝ者。新義の者かゝも。

者の者ふ。ゝうへゝゝやゝれけゝう。産ゝ
むゝぐゝふ国ゝゝゝまゝ。宮男羅大将さわ
ゝうじ業。義及ゝこゝ後ゝやゝべゝ。王三十二代用ゐ
天王の浄ゝうゝ正業。代ゝくの記録。祈ずゝゝ記
祈ぐゝれ男ゝゝ中ゝ。ゝ産ゝ。飢饉。飢死の事

人王五十九代　宇多院御宇　寛平元年
人王八十一代　安徳天皇御宇　養和元年
人王一百一代　後小松院御宇　應永十三年
人王一百三代　後花園御宇　文安五年
人王一百五代　後柏原御宇　永正元年

同

永正十五年

去一千八百年ニ当る年の事。諸国の記録に書
付し飢饉餓死かくのごとくありと云へども
ひべさかるなり。安徳天皇の御宇。養和の飢饉
ハ穀の種とたらず。金銀と称して餓死を免
れ難しとして。銀金し申候ハ。一様
しるし来まで。洛中の路頭に死骸の
三月四月。五月の間ハ空方二千三百人と云。
河原に色々に死骸ハ数千方の数と云。仁
和寺隆暁法印の記に。今度の飢饉
国土に無きみちなり。むべき金銀つきて
糸の町中に毎年六十方石と云て飯米と
寛永十八年書しるし二十年の長まで米
石よりさて飢ゆ。たくさんまで。一
万八千貫目洛中の者ハ。いたのやしけるあり
八科目一貫二貫と称して。桜代井連天看
小ひの者ハ餓死。彩物の誓ひ。ふいくなりひ。
やうく米の値合よりなりんとせしに米たく
なり。ふかの人の。絶ぐなり。商賣人
職人。町人。百姓。社家。寺。ぐ。ぐ。ぐ。

仏像ゆきはぬ鐵ゆ死ぬ
艦よとそぶ。の弦の金ゆ
瀧よ山ーさまやいとあんしそなりけり
嵐いのへの百が十にたどそやけまこが
つけうわよ。あ屋より。猿のかうらといさこ劍
と拾麿虎屋大ねしてさうげかの仁でを
まひ宮思羅大ねも何となげこさいぞひ
より。京童のいまは。ぬよたりひあるかとや。
人王の。清ちう。天安
ぬ斑の。ぬ野しいふ丸ぬ葉か
しまは。よたりひあり。ぬ枝とあえてといひ
ぬ十八年の秋の。ぬ京童のぬや。ぬ
や。矢食やと云こやりけまで。ぬ九年の蓋
よ。表紙云ひりんこそて。紙よ門ぬ矢
食と作りけり。ぬ。ぬよたりひあるけり

治信知ひこひそまひ。ぬ。これひとあこ
と。天安二年の。十一月七日。ぬ。治承信のりて
人王の十六代。清和天皇しゆ。ぬ。惟喬乃
ぬこひえいよのぬ。ぬ野しいふ丸ぬ葉か
らせたりまする。ぬ枝とあえてといひ
しまは。よたりひあり。ぬ。ぬ
ぬ十八年の秋の。ぬ京童のぬや。ぬ
や。矢食やと云こやりけまで。ぬ九年の蓋
よ。表紙云ひりんこそて。紙よ門ぬ矢
食と作りけり。ぬ。ぬよたりひあるけり

ちまき寛永年中に人の身よりの
さいちゑとたまつりもの。ひぜん藤と
ゐうろ人やまへひぜんたろうたちをいとめ著す。
同じく寛永十四年に西国肥前より右刑部丞冊
とゐう邪法の一揆おこりぶ武士ひとり
て誅ちこれも敗よりたりしのあり世りの寛永
十八年の法度法交よりて作りてとおらと作いぐさゆう
ど作つけちうとおらちれて世ゐせど
くゆゑちさまとといひりまじちごく
とのおうたくれたく飢饉の世となりこの法
ままたいさうの四しやうまりけ
まじ。ゆるる国おそ交ちさまれのうべし。ゆうまえ人
らでやうさけりまたうわよ男一人ちうれ
二郎の前よ産しとのく紙というう者と
ちりめとと三国よりまもなくさだ黒し云者
してゆ。中地大聖不動ゆまの分身。被掃寄
ままハ布袋吾朝してハ大黒しちりハまて七
福万宝とこの樵して折おゐ福生に被とわる
ゑ。甲子の日と縁日くこ。
らやそうしとへようやまりれ世振のうち

義ちゃうぞいと侍家と殺そのあとまもなく
使者ハ殺ずこなり十二神の時ハ宮殿大お
きて龍のかちいくさたのもしに如意宝珠
と指ぎ見つる眷属よ。男殺ずこと女殺ずこと白龍
の殺ずこ小龍。赤日殺ずこ殺ずこ。お殺ず。行〇
のこ。産屋のうちハ赤龍よりなまでこ
見。仏像ようとしびゆ事と業師へどのくと
たのこ宮毘羅大将所行つくとべたふ。道中
也中。法合わくこうのうちり我ハ事
中ハ。師へ師上こ時華殺ずこハ大黒

の使者なこ。大黒へ殺おされらぐ
さこてやわぐさ使す殺ずそこ。
ぶいこ。毒ふこのひ〇さべくん。どのく
ハ脂黄の殺ぶこけたなくゆこて。大黒ハ殺
こ業師のこんびくとりくおたふ。
業師おさせたすひそのいぶ久くこ殺よ
わくこずのぶ菓こ。えいこ山中堂の業師へ殺徒
年ハ殺こてぶ乳こ。ぶるこ山こ
中ハ。大黒ハ日ぶ。肥濁なくれひぶ。殺乃殺こ痩く。
小糠くなくせたまこ事。殺ぶ殺こ

ぞ。だいぶつのいしゝ。今の仏像すつさ。宮殿堂塔大石の
巻屬。移ごとく。無中まつる。弥勒如来。ほとけ
ほう。この女仏。偈よ及ヤ。軍。御本尊。隠へ。所。祈
ヤあげ。ほう。慈悲とめ。ら。ら。へ。ら。ま。ほう。やう。め。。。葉。ど
たのまれ。葉。ほう。我。ま。も。は。弥。。。

ひゝ身なまじゝ堂をしてもゆまぎぶらも
ねゝやさでぞ生あれ人せ柳のうれ義ひやうぶの
と信濃し殺なりぞ登山の初ぶらう合ぞのこた
てまつる迷ぞ道のあでに集に矣とぞ行ろ
しらぬ下これ入り。達者に面りなりんぶら
よの小槌して第所のぶーやべー業師宣
ましに。まだ人まさ阿ぶしてゆして。扇井。
風門。青宣。曲にはわ後たまぶ立さてく
冥加なさぶ事してい。何るゆ孔や多人
ぶ。鍛の面ぶひさうり。鍛も質よとぶやりく

この槌小枝しんぶ。腸めぶ。拍りさゃい。
さてく。第国去ぶんぶ。飢饉よと
ぶ中事ぶうゆよ八てうや業師宣れな
つさあ祝のゆぶわりぶやーさ愚者のやーに。
ぶ八知ぶうりのぶめ事ぶまりぶまたくり人義よ
つあとさ虫と養ぶまさ八移て立なたまい。
ぶもぶとたくへあ物ぶ利分やとさ傷祝
なぶれぶまたぶひとぶさぶめ裏らぶとぶまく藤
国よやぶ焼ぶのわゆへぶぶくもわるぶ事に
虫よなぶ。ぶ下ぶ平なまぶ行さぶひ歌い

ありてめぐなりて人間はやとをぐすべ給ふ
ちりさ生れ半ばるを大猫嵐までも仇雄が
妙侍の金船ときて好びんで世界の船りを
しこ形ることのおなじ殺生代わそぐすまと
やしぐはやりけり 船あるへの法はいるすは
仇雄しこ事天地人の三災にて三つ一りたこ
妙者や今の仇雄は三つのさりひにわるどへ
る踊と天道あくしたはまふその天罰のなと所
なりそれ天はアてろとうさたまを金船りの
ないはこ云のあく縁なり賤男なること金船

もちなり老はこの氏系畠ともすれ家まる
まるこにけりの岩と嶽郭のごくけこ屋敷
とくくに三階部居間とかくまれりわれ他
薄絵とまけて遊けさ。鳥ろ海石山
石と立なるべ鯉鮒などとるとこ庭ぞ
数寄屋と金ぬるふ。璃瑠とりの常楽歌浄
の風ものびむこやもそ砂の義と芝。庭れ桂来
ものこへ上げりへ住云門の蔓下地屋生と鳴。
天国の絵けて。高朝の古筆。代々帝のれ
筆紙ぬ元の沼經冊金の屏風よ押るべ。

とのゞ様よりそへて冥加なること振舞ふ
るゝ事ありにぶみ
もりあかの○わろ後鄉と
もれぬなどのゝ
まゝ
とかうすゝめて
ハ喰ひ
ゐも指
も指
とかりへ
蛍の縁
なりゝ親のまゝ
りゝ
て耕作
ゝ野
けゝ
も酒
にけ
よ
けゝ
ゝ代と
ゝ山林田畠
ゝ
ゝ
ゝ

て命なすべへけり。遠国も他国も飢饉して、木
の味とひろい葉と橡・葛の根とをとりて、半るの
じくまと喰のこせる芋の如く、年貢
ぐ人指よまぐわもの鍋ともわんぐ作ぐ。年
馬うしんも人うりぐ雪に枝折をとり面白ぐ
ごらんうけさろ葉ぐ成るひえ豆人のぐり来
て乞食をとうこかるべけ。まさいの男人物
ぐうり。我ハ上京うてぐ人ふ上まって新をとり。
れさうに阿ぐり樂をとして謡や幸や鞠をを
てわそぶ踊やなうりのうぐ芋ぐなるまバ来

山。紙薗清水四条河原や下京よ。祇園の
し言けり。裏ハ九山双林寺。川狩相撲よ。舞
わそび。橋そ小ぐるとぐ孫ひ紀新ふ人よ。浮絵や
る雑よ。ぐりうぐけ。みるハ垂央よ。ぐるごぐけ絶
みの海図と物うけて。孫なすぐう和食のぐつさ
ぐ。ぐんぐとやうやうもぐ人とぐんわう。楽
よ敷とそてぐうに紅梅りとつけ。花ぐりう。
ぐさの鍛ぐやよ。金解大ふうう遠ぐる磯ぐ。の
赤綿たびぐ行ぐぐい坊市で新うて。刑戸製地
の市鈴よ。桜のさご樹よ。九州珊樹ぐ。ぐう

事とひさ敷ものの掛てゆんたとさ
やぶまぬことをさてぞれ
まてぬりしを糸門糸よりたゝ初て絶
うゝそ会なを。楽とろ者の男の沙
糸を四舎もたるを事とそ絶りけを
歌のうら絶ぞ千洋の男ぞ四舎の者と見
をなをまり剖うて。我国豊か名字とバうて
ぞうてどのくの物絶ぞうゝこけバ一家
楽とめられ海山をもぞんとやぞ美国大
国うんたうさぞ多を楽よ後人ぞのゝくん

とぞうけなをれの者ぞ玄宗帝ぞ二人の
后とあつめ玉ゝまを皇后淑妃とてぞ二人ぞ
寵愛なをれを海の政をぞたゝまを
少人ぞ大ゝくんたをを二人の后をもうをを真
後玄宗ハ西遊寧王の后よむうんゝ楊
貴妃とうゞひうゝうのゝ皇后淑妃よ海
うり寵をもあり楊をを妃ぞ兄楊国忠とあを
上ね軍の司下さうを安禄山ハ光てうやむわう
時楊国忠ぞ十方騎の兵さ反敵とうん
がたをふ招ぞうゝ楊国忠ぞ荒ぞ山ゝ陣と

とり上げたるもいとゆゑ古へ唐土
事に傷れしの味方一万騎ばかり首とさうり獻の
首ーし投降してさうもとぐられぬる者のみ
孫皇とうとん安孫山とたゝめ大おゝし楊
國忠とうたんとゝ也楊貴妃とゞひし楊國
忠もう也玄宗皇帝の世代ゆゝれけゝ若
ハ舩ハ水とゝ水ハくゝ永と流ぬりの
なれども舩と櫂もあるり天道よくま
也めまゝ水さ流れぬりのとなりゝ
湯國忠と上ぬ軍ぬなきれしゆへなりと也

きこゝろ殷の紂王して榮花ふりこ
つたまゝ悪王ゝ世界に我よるもひけるこの
かゝ人ハ和よそしゝ西風こゝ湯乃まゝにるさ
まとゝくむかつもけるとゝ紂已とゝ妲
人と寵愛して多の民とうなるゝ將
のゝまゝ苦とゝ苦とゝ雷のゝあふゝ也
ぬ秦乃始皇帝ハ多の樂よねどゝ酒裏と流
りゝ三百七十里ゝ作ゝ作ゝ儒書
三ゝ七百六十余巻と燒て國中ゝ武異
乃劍とやさ捨榮花と道とて流ぬ

ようまつ。この以ていん。生老病死のくるしみ
となげき。蓬莱の海ふかく。不老不死の薬
をもとむるに。海まんくとふかく。ひるすく
かつて。終に神のうさなくんといりたまつ。
邪。鍛大奥とわりまつ。海よりうびたまへば。
始皇帝。百千の毒の矢をもて。討殺しそたまつ。
その後。始皇帝。美なる弟神と戒とはらん
ドたまひ。驚むるくなりぬまつ。運命天
ふかりといへまつ。なたまたまりぬしそうる
てけまつるに。耶郭といつてはんより波

ゆう十二月四方の大石義ぢ白の文まわり。秦
の代ゆうび。漢の代なるべしと書くり。始
皇帝さこうめ。石ハ天ちを降半分ハ人の
なすなるべし。四方十里の内の老ぢの男
女一人もこのこさず。首と切まつ。道よそむけり
人ぢも賜ぢ。たるぢ。たびうるの天みくうたた
まつとうへさりぢ。ゆうぐるや。日本ハ神国こうひ。
敗西ぐ。たし。えとの恵うて。海ちたけさ
せぬ。代こそ。貝和歌山。むう。不思議ゆう。
文永二年のこ。ちえ。ちより。善新人長船七

万余艘よ。人数三百七十万。海漕く漕く
ゝる船とゝぶ。たゝえの無船。日本の地より
うんゝせ。に。ゆ。海ゝりまで。海ひさ
陸地よりて。たゝえの無ゝ。弘安四乙卯
ゝゝ。天國の夷。ゝまの右利ゝ。冊無船四千艘
人数二十四万。吾勢人来。七月朔日に神風吹
き。一人を不残海中にしづむ。異国より
ゝ。たゝえゝ。吾勢人。七度ゝ。ゝ。
一度も。ゝ。乃地人。ゝ。ゝ。勢列。鎌倉
よ。鬼神。ゝ。ゝ。征夷将

軍八幡勅。觀音乃ちゝとゝ。ゝこれとゝ
ゝたまふ。義の國義田乃住人。源氏乃
ゝハ。ゝ。像。戾。ゝて。異神のおとこ。ゝも八
幡大菩薩乃ちゝとゝ人たまひてゝ。
ゝゝ。名。劔と。ゝゆ人なりと。ゝ。ゝ。
大異のゝゝ。天下太平に。人ゝなる
ゝ。年。ゝ乃古。ゝ。ゝ。の。劔の代と
なゝ。月。代。ゝゝの事。年代記。
よ。書。ゝめん事。ゝ。ゝ。系。田舍武家
百姓。町人。ゝ。ゝ。乃。ゝ。ゝ。ゝ。

らうじ事はあるべからず。ゆめゆめ後事なし。
さて。藥師の宮。病樂ふまりたる。愚者を賢
き金銀はりてうりかひとなるものとなるべし。
ハ智者といひ必ずこれと數ひ。ひらゆうとなり。
その身はうり樂とこのむ。自病よ病氣乃
作さ。命と知身よりあまりふとしらるの。
六十の齢とぞ。ふりつんなるべし。命
なるべんハ。是智者なり。智者人ハ自病あり
事まれなり。浮世中に醫師多ありて。病
者短命のんあり。命ゑん醫師なくの者て

食ふすく。食ふ万ずと喰。山野に若草し
て。命の羅ふり。ハ元とまりたまふ。
元ハ民とまりふ。改たぐーけまぐ。
海安全なり道とぞ。後樂とこのむ
者。天道ゆくこゝ。ハにくんたまふ。ハ佛
神もこゝ。たまふ。仏神よ捨らまたる者。現
世ちかくのごく。ほ世もれあるとのこれる
うさ世うか。ふるゆ町のうげよ。親とて
おと捨。その数こゝかざりをかたやとな
ぞおとなるも。百生の縁とこく。胎内より十

三佛の一滴をもつて新鑊し。三十八めを
もつて誕生をと。捨てのあつまり峰を迷途より
て。ぶ道の化地義喜薩よりつきてぶこ
ひし毋こひしやと叫声をもつていづでまる
ゆべし。ハうちやぐでん。ハ阿真金剛際ま
でもさゆべし。ひかりの西乃男門天より
まのり。仏儀よりのどりか。絵ばめるへ
ゆへとやに異門乃天乃絵とやハ。虚空ゆ
りこうたまりぬるし。十絵の擔乳絵の
絵とやて

第一より元盡の福
第三より大智恵絵
第五より眷屬元多福
第七より田畠乃絵
第九より善智識絵
第二より象人也敬絵
第四より長命乃絵
第六より勝軍乃絵
第八より蠶養如意絵
第十より仏果大世喜捨絵

とてありこの福まいめら燒ちてくるまへど
もあるへ行のをさう元生るし。男門天の絵
とやもこ。一ゆ父母若養のたのゆくもん。二ま
も切徳善根のあのつ乃。三ハ国土豊饒の
ものの乃。四ゆ元と喜捨のものの乃。

のごく敬のうとうと。今獨よのぞむして
て。ゆく〳〵敬とあるべし。人たまゝ事あるべし
して。仰げば。唯今ばかりのみ事あり。
地蔵菩薩。ちからの。菩薩のうちふ慈
悲。身一なり。菩薩なれ。伝羅陀山にて。
五一万二千菩薩。三万六千人。諸天夜叉の
中にて。説くゆへに。経にいはく。十種の敬あり
一。人人春屋。二。別根異号。三。象
嵩意除。四。人寿命を。聰明智恵。
六。人財宝盈溢。七。人人数八。人人穀米
成熟。九。人神鬼加護。十。人證大菩提。
擔承し。一。人風雨随時。二。人他国不
起。三。人自男不数。四。人日月不蝕。五
八星宿不変。六。人思神不来。七。人刑
懲不發。八。人人民充満。説くゆへに。
承いそむるかんや。逆ろう地獄
能仕とゆゑ。ごうむ〇中入べし
沙菩薩地獄
伏足油掛地獄
常盤要地獄
山科六角地獄
樋川鳴地獄
多賀地獄

玉造の地蔵
五安地蔵
目疾地蔵
矢田地蔵
光昔地蔵
服部地蔵
大江山地蔵

とのくへへ。鹿鍾神のゆふとくなる。
あまりひぬ。穀成熟して。天下太平
小天魔の障。尋なく。上一人より下万民
りいたるまでゆまくの。ゆたかなる。
りくめまつべし。おうまんてく。向後楽とこ
のみとどろまりわろ。後者天みくと

たまふ天罰のごとくして。宮けりたる。のい
ちくに。家ひとなる物語のい。都一条の
西。鏡石町の辺よりの。奥なる者母とり。常
よ者沙なる事うぐさりの。父のとんと
山のごとく。母のとんは大海ちゆくしうけ
ゆりる。父母赤白二滴合して。人となる。
まことに海山はうさるあんとかうく。彼と
ひとつ。家まづけ。行ひまにあるど。
祝うへて。母とともごとく中。あ。業なるなり。
今この鹿鍾よりせ。事とうるまで家賊

とうてやうのひさてまつり。嶽にうずるに
盜賊なれどやどうく家財奪はてゝ行
き殺るーやとあんど炬けり。門系ぶ
きんと名づけ。浮世の中の男人よ。ぽつちかさ
とトされけりゝ。行やゝ若狭かたる男。撥うて
けなくなりし。孫と撥ちこぶ。ゝ。孫よる命
まわりて見とひろい。行やところ。ゝ
養ゝとてまつり。ぽこた道ちわるゝ
しぽろ人。女者わりがさこゝ味ゝつ
ゝ。べこそなりゝ。けまひりも今も軍

りゝ。ゝ。ぽ道とやづゝど。親若狭かた
りのぽ。ぽりあ。ありとぞ行りひけ。茶
師。宮男羅大ね眷屬の孫どこ。ぽ。このよ
ゝ。ゝ。ゝ。

[illegible]べし 若右の趣[illegible]
[illegible]ずこれあるをわすれ
[illegible]と[illegible]に[illegible]
[illegible]

寛永二十年二月日　大黒判

[illegible]

元文弐年

[illegible]